

真理とは何か？—その一

真理の枠組み：啓示、預言における並行関係、そしてアルファとオメガ

Jeff Pippenger

2023-08-05

真理とは何かという主題に入る前に、私たちはこの学びを黙示録1章の最初の三節から始め、その後エリヤに関する記事を加えたことを指摘しておきます。これらの学びの目的のいくつかは、預言におけるアメリカ合衆国の役割を見極めること、イエス・キリストの黙示のメッセージを解き明かすこと、預言者が神の民の象徴として果たす役割を認識すること、そしてイエスがアルファであるとは何を意味するのかその含意を考察することです。私たちは、黙示録の最初の三節が黙示録の最後の諸節と一致し調和していることを示し、そして冒頭と結びの双方において、イエスがご自身をアルファでありオメガ、始めであり終わり、最初であり最後であると示しておられることを明らかにしました。

第二の研究では、聖書の冒頭の諸節が旧約聖書と新約聖書の結びの諸節と一致していること、さらに新約聖書の冒頭の諸節も、聖書を全体として見る場合でも二つの約として見る場合でも、その始まりまたは終わりとも一致していることを示すために、エリヤに関する簡潔な考察を用いた。

私たちがさらに展開しようとしているもう一つの点は、神が歴史を通じて神格を徐々に明らかにしてこられたという理解である。ゆえに、聖書における契約史という主題において時が進むにつれ、神はそのさまざまな御名の象徴性を通して、ご自身の御性質を一步一步、ますます明らかにしてこられたと私たちは指摘してきた。全能の神はアブラハムに語られ、同じ神はモーセにも語られたが、その際モーセには、それ以後その御名はエホバとして知られるべきであると告げられた。次に、キリストが来られたとき、旧約聖書には知られていなかった名でご自身を示された。ただし、その名の表現がダニエル書三章で一人のバビロニア人によって一度だけ用いられていることを除いて、イエスは御父の独り子であることを示されたばかりでなく、その特定の契約の歴史においてご自身を人の子であるとも明らかにされた。神はまた、アドベンチズムの始まりと契約に入られたとき、ミラー派アドベンチズムにも名をお与えになった。

今や、終わりがこれほど近づいているこの時に、私たちは実際の行いにおいて世とあまりにも似た者となり、人々が神に名づけられた民を見いだそうとしてもむなしく探すことになるほどであろうか。神に選ばれた民としての私たちの独自の特色を、この世が与えるいかなる利得のためにも売り渡す者がいるだろうか。神の律法を犯す者たちの好意を、非常に価値あるものと見なすべきだろうか。主がご自分の民と名づけられた者たちが、大いなる「わたしはある」よりも高い力があると考えべきだろうか。私たちがセブンスデー・アドベンチストたらしめてきた信仰の特色となる要点を、消し去ろうとするのだろうか。『伝道』121頁。

セブンスデー・アドベンチストという名称は主によって与えられたものであり、ホワイト夫人はしばしばアドベンチストを「神に名づけられた民」と呼んでいる。「denominate d」とは、名前を与えられていることを意味する。ホワイト夫人が神の「名づけられた民

」として挙げているのは、古代イスラエルと現代イスラエルの二つだけである。

ですから、『ヨハネの黙示録』の研究を進めるにあたり、十四万四千人としても表されているフィラデルフィアの人々に啓示される「新しい名」は、恩恵期間が閉じられる直前に封印が解かれる預言の秘密の大きな部分をなしている、と私は提案します。

勝利を得る者を、わたしの神の宮の柱とし、彼はもはや外に出て行くことはない。わたしは彼の上に、わたしの神の御名と、わたしの神の都の名、すなわち天から、わたしの神のもとから下って来る新しいエルサレムの名を書き記す。さらに、わたしの新しい名を彼の上に書き記す。耳のある者は、御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。ヨハネの黙示録 3章12、13節。

最後の警告のメッセージは、イエス・キリストの啓示のメッセージであり、それは彼のご性質の啓示である。

「花婿の来臨を待つ者たちは、人々に『見よ、あなたがたの神を』と言うべきである。あわれみの光の最後の光線、すなわち世界に与えられる最後のあわれみのメッセージは、神の愛の御性質の啓示である。神の子らは、神の栄光をあらわすべきである。彼ら自身の生活と品性において、神の恵みが彼らのうちに行ったことを明らかにすべきである。」『キリストの実物教訓』415、416頁。

『言（ことば）』としてのイエスについて記録に加えるべきことはまだ多くあるが、ここでは『真理』という語を取り上げる。『真理』の理解、また『真理』という語の理解、さらに『真理の言葉』を構成する文字の理解は、キリストの品性の理解である。

そこでピラトは彼に言った。「それでは、あなたは王なのか。」イエスは答えられた。「あなたが言うとおり、わたしは王である。わたしが生まれたのはこのためであり、このために世にきた。真理について証しするためである。真理に属する者はみな、わたしの声を聞く。」ピラトは彼に言った。「真理とは何か。」こう言って、彼は再びユダヤ人たちのところへ出て行き、彼らに言った。「わたしはこの人に何の罪も見いださない。」ヨハネによる福音書 18章37、38節。

その節で「真理」と訳されているギリシア語は、ヘブライ語の語に由来しており、その語は文字でもあり、さらには数でもあります。ヘブライ語のアルファベットの最初の文字は「aleph」です。実際、ヘブライ語のアルファベットの最初の二文字は「aleph」と「beth」で、これはギリシア語の最初の二文字である「アルファ」と「ベータ」に非常によく似ています。これらを合わせると「アルファベット」という語の語根を成します。したがって、「alpha」（ヘブライ文字の「aleph」に由来）は、文字、語、数として、さらにイエスの多くの名の一つとしても用いられます。

ピラトが「真理とは何か」と尋ねたとき、イエスはすでに、彼が「この世にきた」理由、また「生まれた」理由は「真理」を証しするためであると彼に告げていた。さらに彼は、「真理に属する者は皆、わたしの声を聞く」と付け加えた。

この預言のことばを読む者と、これを聞き、その中に書かれていることを守る者たちは幸いである。時が近いからである。ヨハネの黙示録 1:3

真理：G225-G227 から；真理：- 真実、X 真に、真理、真実性。
G227-G1（否定の語として）とG2990から；（隠さないという意味での）真実の：-
真実、真に、真理。G1；A. ヘブライ語起源。アルファベットの第一文字。比喩的にのみ
（数値として用いられることから）第一。アルファ。

イエスは彼に言われた。「わたしは道であり、真理であり、いのちである。わたしによらなければ、だれも父のもとへ行くことはできない。」ヨハネによる福音書14章6節

イエスが「わたしは…真理である」と言われたとき、彼は自分が文字であり、数であり、言葉であると言っておられた。というのも、アルファという文字と、アルファという語と、アルファという数は、いずれも「真理」だからである。ダニエル書において、キリストはご自身を「驚くべき数える者」として現されたが、これはヘブライ語の語「Palmoni」の定義であり、それはダニエル書8章では「語ったある聖者」と訳されている。

そのとき、私は一人の聖なる者が語るのを聞いた。すると別の聖なる者が、語っていたその聖なる者に言った。「常の献げ物に関する幻と、荒廃をもたらす背きによって聖所も軍勢も踏みにじられることは、いつまで続くのですか。」そして彼は私に言った。「二千三百日までである。その後、聖所は清められる。」ダニエル書 8章13、14節。

十三節の「ある聖者」とは「パルモニ」-驚くべき数を定める者、すなわち秘事を数える者-のことです。この二つの節に、2300年の預言と、2520年の二つの預言が示されています。2300年は「聖所」に関し、2520年の二つの預言は「軍勢」に関するものです。というのも、聖所も軍勢もローマによって踏みにじられるからです。2520年の預言は、神の聖所と民が踏みにじられることを表しています。イエスがご自身を、秘事を数える驚くべき数を定める者として紹介される、まさにその聖書の箇所、時間に基づく相互に結びついた三つの深遠な預言があるのです。イエスがご自身を時の主として紹介するために単にこの二つの節を選ばれたというだけではありません。むしろ、イエスがご自身を現されるその二つの節は、イエスが現代の霊的イスラエルと契約に入られる時を特定しており、しかもこの二つの節こそアドベンチズムの土台であり中心の柱でもあるのです。

再臨信仰の土台であり中心の柱として、何よりも重んじられてきた聖句は、「二千三百日まで。そのとき、聖所は清められる。」という宣言であった。[ダニエル書 8:14] 『大争闘』409ページ。

1798年の「終わりの時」に、ダニエル書の封印が解かれ、第一の天使のメッセージが歴史に現れた。これは、セブンスデー・アドベンチズムの始まりであったミラー派運動の時代に生じた、預言的知識の増大に画期をなす出来事であった。ダニエル書の封印がミラー派に対して解かれたとき、パルモニからの、すなわち時のメッセージが理解された。神の御言葉は必ず成就し、常に終わりを初めと結びつけて示す。ゆえに、アドベンチズムの終わりにおいても、ミラー派の歴史においてそうであったように、必ず神の御品性の啓示がある。この事実は、アドベンチズムの始まりと終わりに基づいているだけでなく、ダニエル書と黙示録との関係について明言されているところにも基づいている。ダニエル書と黙示録は一つの書を成しており、その意味において、この二つは二人の証人であって、最初がダニエル書、最後が黙示録である。

「ダニエル書と黙示録は一つである。一方は予言、他方は啓示であり、一方は封印された書、他方は開かれた書である。」セブンスデー・アドベンチスト聖書注解
第7巻、972ページ。

ダニエル書と黙示録は、ちょうど聖書が旧約と新約、すなわち始まりと終わりに分けられた一つの書であるのと同じように、二つでありながら一つの書である。黙示録11章では、モーセとエリヤとして示されている二人の証人は、旧約聖書と新約聖書である。

この二人の証人について、預言者はさらにこう宣言する。「これらは二本のオリーブの木、また、全地の主なる神の御前に立っている二つの燭台である。」詩篇記者は言った。「あなたのみことばは、わたしの足のともしび、わたしの道の光です。」黙示録11:4;詩篇119:105. 二人の証人は、旧約聖書と新約聖書を象徴している。『大論争』267.

ダニエルとヨハネは二人の証人であり、両者とも迫害され、捕らえられ、同じ系統の預言史を記録するよう託され、十四万四千人を表し、エルサレム滅亡後の時代に生き、また死と復活の象徴でもある（ヨハネは煮えた油から、ダニエルは獅子の穴から）。

ダニエルはキリストの品性に関する特別な啓示を示しており、それは靈感によってセブンスデー・アドベンチスト教会の「中心的な柱と土台」と呼ばれる二つの聖句の中になされている。その二つの聖句は「冠石」、すなわちウィリアム・ミラーの働きによって表されていた土台に据えられた最後の石であった。その冠石は、天の聖所、神の律法、安息日、調査審判、そして黙示録十四章の三天使に関する理解をもたらした。ダニエルはその書の始まりであり、ヨハネは終わりである。

ヨハネの著作は、アドベンチズムの終わりにおけるキリストの品性の啓示を明らかにする。現代のイスラエルの初めに、彼は不思議な数を数える方、あらゆる数学的なものの創造主としてご自身を現され、現代のイスラエルの終わりには、驚くべき言語学者としてご自身を現しておられる。彼は、言語の構造、文法規則、語、さらにはアルファベットの文字に至るまで、言語に関わるすべてのものの創造主である。彼は、語によって成り立ち、書かれても話されても文法規則に支配され、彼の設計によるアルファベットで記されるコミュニケーションを創造された。そしてそれらすべてを超えて-彼こそが「ことば」である。そのことばによって、彼は盲目で備えのないラオデキヤ人を、聖められたフィラデルフィア人へと変える。

彼らをあなたの真理によって聖めてください。あなたのみことばは真理です。ヨハネ17:17.

「sanctify」と訳される語は、聖なるものとするを意味する。十四万四千人は聖なる者となり、彼らは「真理」によって、言い換えれば、彼の「言葉」によって、そのような品性の状態に達する。というのも、イエスは「言葉」であり、また「真理」だからである。

初めに言葉があった。言葉は神とともにあり、言葉は神であった。この言葉は初めに神とともにあった。万物は彼によって造られた。彼なしには、造られたものは何一つなかった。ヨハネの福音書 1章1-3節。

ヨハネが自らの福音書で最初に記しているのがこれであることに注目してください。これはもちろん、創世記の冒頭に書かれていることと呼応しています。そして証言を補強し、創世記1章に記されていることをより明確に示しています。

初めに、神は天地を創造された。創世記1章1節。

1節で「神」と訳されている語は複数形であり、したがって、まさに「初め」から神が複数であることを示している。ヨハネの福音書では、「初めに」ことばは神とともにあり、神であった。そして、そのことばは創造主であった。

イエスはことばであり、彼は神性と人性を結び合わせることによって聖書を生み出した。すなわち、神性は聖霊によって表され、人性は、諸教会に送るための書物にそのことばを書き記した人々のうちに表された。したがって、聖書はイエスと同様に、人性と神性の結合である。墮落した肉적인人間が関与しているにもかかわらず、聖書は聖なるものであり、またそれを筆記した人々も聖なる者であった。

また、私たちは、さらに確かな預言のことばを持っています。暗い所で輝くともしびに目を注ぐように、それに注意を払うのは、あなたがたにとって良いことです。やがて日が明け、明けの明星があなたがたの心に昇るその時まで。まず第一に知っておくべきことは、聖書のどの預言も私的な解釈に基づくものではないということです。というのも、預言は昔、人間の意志によってもたらされたのではなく、神の聖なる人々が、聖霊に動かされて語ったからです。第二ペテロ 1:19-21

預言者たちは聖なる人々であったが、やはり墮落した人間であった。すべての者は罪を犯し、神の栄光に及ばないからである。それにもかかわらず、聖書は神性と人性の結合であり、聖なる書である。というのも、神の御言葉は、ご自身の生涯と書かれた御言葉において、神性と結合した人性は罪を犯さないことを示すために来られたからである。聖書について真であることは、キリストについても真である。なぜなら、キリストは聖書そのものだからである。

イエスは罪ある肉を身にまとい、決して罪を犯さなかった。こうして、人性が神性と結びつけば罪を犯さないという模範を示された。

ベツレヘムの物語は尽きることのない主題である。その中には、「神の知恵と知識の富の深さ」が隠されている。ローマ11:33。私たちは、天の御座を飼い葉桶に、また、あがめる天使たちの交わりを厩舎の獣たちにお替えになった救い主の犠牲に驚嘆する。その御前では、人間の誇りと自分で足りるという心は戒めを受ける。しかし、これは彼の驚くべきへりくだりの始まりにすぎなかった。たとえアダムがエデンで無垢のうちに立っていた時であっても、神の御子が人間の本性をお取りになることは、ほとんど無限の屈辱であったであろう。ところがイエスは、人類が四千年の罪によって弱められていた時に、人性をお受けになった。アダムのすべての子らと同様に、彼は遺伝という大いなる法則の働きの結果を受け入れられた。これらの結果が何であったかは、彼の地上の祖先の歴史に示されている。彼はそのような遺伝を帯びて来られ、私たちの悲しみと誘惑を分かち合い、罪のない生涯の模範を示すためであった。『The Desire of Ages』、48。

イエスは「ことば」であり、イエスも聖書も、人間性と神性が結び合わさったものだ。イエスは何世紀にもわたって聖書を生み出す中で、聞こうとする者が聞けるように、その中に原則を設けた。聖書を規定するその原則は、彼の品性の特質でもある。

黙示録において、聖書のすべての書は合流し、完結する。ここでダニエル書は補完される。『使徒行伝』585頁。

「complement」という語は、完全にする、完成させることを意味する。ダニエルの証しは黙示録で完結し、ダニエルが始まり、黙示録が終わりとなる。黙示録の冒頭は黙示録の最後で繰り返され、またダニエル書1章1節では、字義どおりのイスラエルと字義どおりのバビロンのあいだに戦争があり、バビロンが勝つ。しかし、ダニエル書11章45節、12章1節における猶予期間の歴史の終わりには、霊的なバビロンが霊的なイスラエルと戦っており、最後にはバビロンが敗れ、イスラエルが勝利する。黙示録のヨハネの場合と同様に、ダニエルの証しの始まりはその証しの終わりとは一致している。では、真理とは何か。

教義とは、信仰共同体が何を正しいと理解しているかを示す語である。その目的や用法は聖書やキリスト教に限られない。いわゆるキリスト教においては、真実のものよりも偽りの「教義」のほうが多いと思われる。というのも、霊的バビロン、すなわち教皇制は、あらゆる汚れた憎むべき鳥の檻であり、その鳥は悪を象徴している。そしてその悪は、「律法は廃止された」といった偽りの教義を通して、教会によって支えられ、覆い隠されているからである。しかし、真の教義もある。

ベレヤ人の心は偏見によって狭められてはいなかった。彼らは、使徒たちが宣べ伝えた教えが真理かどうかを進んで吟味した。彼らは聖書を、好奇心からではなく、約束されたメシアについて何が書かれているのかを学ぶために研究した。彼らは日々、靈感を受けた記録を調べ、聖句を聖句に照らして比較する中で、天の御使いたちが彼らのそばにいて、心を照らし、彼らの心に深い感銘を与えた。

どこであれ福音の真理が宣べ伝えられるところでは、真摯に正しいことを行いたいと願う人々は、聖書を熱心に探求するよう導かれる。もしこの地の歴史の終わりの場面において、信仰を試す真理が告げ知らされる人々が、ベレヤ人の模範に倣い、日々聖書を調べ、彼らにもたらされたメッセージを神の言葉と照らし合わせるなら、今日、神の律法の戒めに忠実な者の数は、今のように比較的少数にとどまらず、はるかに多くなっていたであろう。ところが、不人気な聖書の真理が提示されると、多くの人はこの検証を行うことを拒む。聖書の明白な教えに反駁できないにもかかわらず、なおも示された証拠を学ぶことに極度のためらいを示すのである。中には、たとえこれらの教理が実に真理であったとしても、新しい光を受け入れるかどうかは大したことではないと見なして、敵が魂を迷わせるために用いる耳ざわりのよい作り話にしがみつく者もいる。こうして彼らの心は誤りによって盲目にされ、天から引き離されてしまう。

与えられた光に応じて、すべての者は裁かれる。主は救いのメッセージを携えた使者たちを遣わし、これを聞いた者たちは、主のしもべたちの言葉をどのように扱うかについて責任を問われる。真理を誠実に求めている者は、神の言葉の光に照らして、自分たちに提示された教理を慎重に調べるであろう。『使徒行伝』231、232。

「教理」と呼ばれるものがあり、それは「福音の真理」であって、吟味される必要がある。中には（すべてとは言わないまでも）「試金石となる真理」がある。安息日は、理解しやすい試金石となる真理である。真の教理と偽りの教理がある。真の教理の中には、それを聞く者に試しを与えるものがある。また、特定の時期のために意図された種類の真理もある。これらの真理は「現在の真理」と呼ばれる。

神の御言葉には多くの尊い真理が含まれているが、今、群れに必要なのは「現在の真理」である。私は、伝道者たちが現在の真理の重要点から外れて、群れを一致させ、魂を聖別することに役立たない主題に深入りしてしまうという危険を見てきた。サタンはこの点で、この大義を損なおうとして、あらゆる機会を利用するだろう。

しかし、二千三百日の期間と関連づけた聖所の問題、神の戒め、そしてイエスの信仰といった主題は、過去の再臨運動を説明し、私たちの現在の立場が何であることを示し、疑う者の信仰を確立し、栄光ある将来に確信を与えるのに、まことにうってつけである。私はしばしば見せられたが、これらこそが、使者たちが詳しく取り扱うべき主要な主題であった。『初期の著作』63ページ

アドベンチストはしばしば、この箇所を、そこで実際に述べられていることを避けるために用いる。彼らは、「現代の真理」のメッセージで強調されるべきものは、聖所、二千三百日、戒め、そしてイエスの信仰だけだと主張する。こう主張するのは、これら四つの主題について明らかにされていることを避けるためである。

これら四つの偉大な真理の目的は、それらが「過去のアドベンチスト運動を説明し、私たちの現在の立場が何であることを示し、疑う者の信仰を確立し、栄光ある未来に確信を与えるように完全に計算されている」ことである。これら四つの「現在の真理」の教理は、アドベンチズムの始まり（過去のアドベンチスト運動）がアドベンチズムの終わり（私たちの現在の立場）を例証していることを示すように意図されている。その四つの主要教理は、「初めによって終わりが例証される」という原則を説明するように「完全に計算されている」。この靈感の一節によれば、これは「羊の群れが今必要としている」「現在の真理」である。

イスラエルの始まりは古代イスラエルであり、終わりは現代イスラエルである。古代の文字通りのイスラエルは、1798年の終わりの時から日曜法に至るまでのセブンスデー・アドベンチストの民の型であった。キリストの初臨の前には、ユダヤ人は慣習や伝統に頼っていたため、盲目（ラオデキヤ的）となり、「現在の真理」が見えなかった。

「私たちは、自分たちが生きているこの時代を理解したいのです。私たちはそれを十分に理解していません。十分に受け止めてもいません。私たちが立ち向かわなければならぬ敵がどれほど手強いのか、そしてそれに立ち向かう備えがいかにかを思うと、私の心は震えます。イスラエルの子らの試練と、キリストの初臨の直前における彼らの態度は、キリストの再臨に先立つ経験の中での神の民の立場を例証するために、繰り返し私の前に示されてきました—敵がユダヤ人の心を支配しようとしてあらゆる機会をうかがったこと、そして今日、彼は神のしもべたちの心の目をくらませ、尊い真理を見分けられないようにしようとしていることを。」『セレクトッド・メッセージ』第2巻、406ページ。

私たちの次の参考文献によれば、ユダヤ人は「神の本来の真理」を見失っていた。ユダヤ人にとってその本来の真理とは、エジプトからの解放の歴史であった。その解放の歴史こそが彼らの本来の真理であり、代々にわたって子どもたちに教えるよう命じられていた真理であった。彼らは失敗した。アドベンチズムも同様に失敗した。盲目となったユダヤ人に真理を示すために、イエスは真理を枠組みに当てはめた。

救い主の時代、ユダヤ人は、真理という尊い宝石を伝統や作り話というがらくたで覆い隠してしまい、真と偽とを見分けることができなくなっていた。救い主は、迷信や長年大事にされてきた誤りというがらくたを取り除き、神の言葉という宝石を真理の枠組みに据えるために来られた。救い主がかつてユダヤ人のもとに来られたように、もし今私たちのもとに来られたなら、何をなさるだろうか。伝統や儀式というがらくたを取り払い、同様のわざをなさらねばならないだろう。救い主がそのわざを行われたとき、ユダヤ人は大いに動揺した。彼らは神の本来の真理を見失っていたが、キリストはそれを再び明らかにされた。神の尊い真理を迷信と誤りから解き放つことは、私たちの務めである。

輝かしい真理は人目から葬られ、誤謬と迷信によって光沢を失い、魅力を欠くものとされてしまった。イエスは神の光を明らかにし、真理の美しい光輝を、神的な栄光に満ちて現し出す。正直な者たちの心は感嘆で満たされる。彼らの心は、真理の宝玉を取り出し、それらを彼らの理解に明らかにした方へと、聖なる愛情によって引き寄せられる。

ユダヤ人は真理の一部を理解し、神の言葉の一部を教えてはいたが、神の律法の広く行き渡る性質を理解してはいなかった。キリストは伝統のがらくたを一掃し、神の御旨の真の核心と心髄を示された。これをなさったとき、彼らは抑えがたいほど憤激した。彼らは、キリストが神のみわざを滅ぼしていると、町から町へと偽りの報告を広めた。しかしイエスは、古い形式を取り去りながら、古き真理を回復し、それらを真理の枠組みの中に位置づけられた。彼はそれらを組み合わせ、完全に均整のとれた真理の体系を作り上げられた。これが私たちの救い主のなさった働きである。では今、私たちは何をすべきか。私たちはキリストと調和して働くべきではないのか。伝聞に支配されるべきだろうか。自分の思い込みが神の光を私たちから隠すままにしておくべきだろうか。私たちは注意深く読み、正しく理解して聞き、また学んだことを他の人にも教えるべきである。私たちは、いのちのパンに絶えず飢え、生ける水とレバノンの雪を絶えず求めて、真理の泉の生ける涼やかな水へと人々を導くことができるようにしなければならない。Review and Herald, 1889年6月4日。

イエスは最初に来られたとき、「古い真理を再確立し、それらを真理の枠組みに位置づけられた。彼はそれらに対応づけて結び合わせ、完全に均整のとれた真理の体系を作られた。」イエスは古代イスラエルの初期の歴史を用いて古い真理を再確立され、その際、それらの真理を（主題ごとに）対応づけ、（平行して、行に行を重ねるように）結び合わせられた。これは、彼らを盲目にしていた慣習や伝統からユダヤ人を解放するためであった。その歴史は、文字通りのイスラエルの末期の歴史であった。

アドベンチズムは古代イスラエルの終末期の歴史を繰り返している。そして、伝統と慣習によるラオデキヤ的盲目を取り除くために真理を位置づけるための枠組みは、キリスト

がユダヤ人と関わった時と同様に、今も用いられている。「古い真理」は「真理の枠組み」に位置づけ、預言の筋道を他の預言の筋道と結び合わせ、「line upon line」で並列に置く。これは、ラオデキヤ的な人をその盲目から解放する助けとなるためである。キリストは、すべてにおいて私たちの模範である。

聖書には教義として認められている真理があり、また「多くの素晴らしい真理がある」が、「現在の真理」もあり、これは真理が明らかにされるときに生きているその「世代」の「人々に対する試験」となる。預言的にはこれはアドベンチズムの第四世代に起こり、この「世代への試験」となる「現在の真理」は、アドベンチズムの初期の世代にとっては試験ではなかった。

聖書の中には理解しがたい事柄があり、ペテロの言葉によれば、無学で心の定まらない者たちはそれらをねじ曲げて自らの滅びを招く。私たちはこの生涯において、聖書のすべての箇所の意味を説明できないかもしれない。だが、実践的な真理の要点で不可欠なものが謎に覆われたままになることはない。神の摂理により、その時代にふさわしい真理によって世が試される時が来ると、人々の思いは御霊によって奮い立てられ、断食と祈りをもって聖書を探り、環が一つまた一つと見いだされて完全な鎖へと結び合わされるまで続けられる。魂の救いに直結するすべての事実は、だれ一人として誤ったり暗闇の中を歩んだりする必要がないほど明らかにされる。

私たちが預言の流れをたどってくるにつれ、私たちの時代のために啓示された真理が明らかに示され、解き明かされてきました。私たちは、自らが享受している特権と、私たちの歩む道を照らす光に対して責任を負っています。過去の世代に生きた人々は、彼らに与えられた光に対して責任を負っていました。彼らの心は、彼らを試す聖書のさまざまな点に関して鍛えられました。しかし、彼らは私たちが理解している真理を理解してはいませんでした。彼らが持っていなかった光に対しては、彼らは責任を負っていませんでした。彼らにも私たちと同じように聖書はありましたが、この地球の歴史の終わりの場面に関する特別な真理が解き明かされる時は、地上に生きる最後の世代においてです。

「特別な真理は、各世代が置かれてきた状況に合わせて適応されてきた。この世代の人々に対する試金石となっている現代の真理は、はるか昔の世代の人々にとっては試金石ではなかった。もし、第四戒の安息日に関して今私たちに輝いている光が過去の世代に与えられていたなら、神はその光に対して彼らの責任を問われたであろう。」
『証言』第2巻、692、693頁。

アドベンチズムの歴史に四つの世代があることを否定したい人々には、ハバククの板を指し示します。この事実を理解するごく簡単な方法はこうです。ラオディキアという名は「裁かれる民」を意味します。アドベンチズムの始まりは審判の開始を告げ、アドベンチズムの終わりは審判の終結を告げます。審判の終結は第三世代と第四世代に起こります。

あなたは、自分のために刻んだ像を造ってはならない。上は天にあるもの、下は地にあるもの、また地の下の水の中にあるものの、どんな形も造ってはならない。あなたはそれらにひれ伏してはならない。それに仕えてはならない。あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神であるからだ。わたしを憎む者には、父の咎を子に、三代四代にま

で報い、わたしを愛し、わたしの戒めを守る者には、幾千の者にまで慈しみを施す。
出エジプト記 20:4-6.

審判の終わりに、ラオデキア的（裁かれる民）アドベンチズムの最後の世代は裁かれ、エルサレム滅亡のときの古代イスラエルがそうであったように、主の口から吐き出される。聖書の教理は真理であり、試金石となる真理があり、さらに現在の真理がある。現在の真理は常に試金石となる真理だが、それはいま生きている世代のために特別に備えられた試金石の真理を指し示す。とはいえ実際のところ、よりあり得るのは、私たちが拒むことを選んだ神の言葉のいかなる真理も、私たちがまさに失敗した試金石の真理になってしまった、ということだ。

イエスは神のことばであり、また真理である。彼はピラトに、自分が「来た」「世に来た」理由は「真理について証しする」ためであり、彼の声を聞く者は皆「真理に属している」と告げた。ピラトとイエスが語った「真理」という語は、「真理」と訳されるヘブライ語に由来し、旧約聖書に百二十七回見いだされる。そのヘブライ語（H571）は英語のさまざまな語に訳されるが、旧約聖書では九十二回「truth」と訳されている。これは多くの次元で極めて力強い語の一つである。

旧約聖書で「真理」と訳される語はヘブライ文字3字から成っており、ヘブライ文字では各文字にそれぞれ固有の定義があるため、文字を組み合わせることができる語には各文字の意味が溶け合い、最終的な語義が形づくられます。「真理」という語は、ヘブライ文字の最初の文字、中間の文字、そして最後の文字の三つから成っています。旧約聖書における「真理」は、ヘブライ文字の最初と最後の文字に、真ん中の文字が挟まった形で表されているのです！

これは、聖書における「初出の法則」の定義である。ある主題が最初に提示されるときが、その語にとって最も重要な言及であり、その語は種であって、物語全体を生み出すために必要なDNAをすべて内包している。「初出の法則」における二番目に重要な言及は最後の言及である。というのも、始まりと終わりの間に生じるすべての物語が、そこで結び合わされるからである。「黙示録において、聖書のすべての書は出会い、そして終わる」。そして、黙示録は聖書の最後の書である。

ここで取り上げているヘブライ語の「真理」という語は、「アレフ」で始まり、13番目の文字は「メム」、そして22番目で最後の文字は「タヴ」です。もちろん、定義をどの言語学者に求めるかによって、これらの文字の定義にはさまざまなニュアンスがありますが、一般的な定義だけでも非常に有益です。

א (Aleph) : ヘブライ文字の最初の文字で、しばしば統一と関連づけられ、神性と永遠を表し、神と被造物とのつながりを象徴する。

מ (Mem) : ヘブライ文字の13番目の文字で、水と関連づけられることが多い。

ת (Tav) : ヘブライ語のアルファベットの最後の文字で、「印」または「しるし」を意味する。しばしば、完成という概念や創造の「封印」と結び付けられる。古代ヘブライ語では、この文字は十字の形をしていた。

ここで扱う「真理」と訳されるヘブライ語の語は、三つの文字から成り、その三つがともに永遠の福音を表しています。何ですって？ 三天使のメッセージが永遠の福音であることを理解していれば、これは容易にわかります。というのも、これら三つの文字の意味が三天使のメッセージを表しているからです。

黙示録14章の第一の天使は、永遠の福音を示し、さらに全世界に「神を恐れよ」と告げ、創造主を礼拝することによって神に栄光を帰せよと語る。その三つの文字の最初のもの（アレフ）の定義は、「神聖にして永遠の神、また人類の創造主として、人が畏れ敬い礼拝すべき神」である。

アレフは第一の天使のメッセージを表す。

第二の天使のメッセージは、人々にバビロンから出るよう呼びかけ、聖霊が注がれる時を示し、バビロンの反逆を明らかにする。メムの意味は水と結びついており（聖霊の注ぎの象徴）、それはアルファベットの十三番目で、十三という数は反逆の象徴であるため、バビロンを指し示している。メムは第二の天使のメッセージを表している。

第三の天使は、獣の刻印を受けまいよう人々に警告し、礼拝者を二つの類に分け、神の怒りを示す。タヴ（Tav）の定義は、それが「印」（獣の刻印）を表し、創造の封印（神の封印）を表すということである。その文字自体は十字架の形をしている。タヴは第三の天使のメッセージを表している。

神の民の額に押される生ける神の印とは何か。それは、天使には識別できるが、人間の目には見えない印である。なぜなら、滅びの天使はこの贖いのしるしを見なければならぬからである。理解のある者は、主に養子とされた子らのうちに、カルバリーの十字架のしるしを見ている。神の律法を犯す罪は取り除かれている。彼らは婚礼の礼服を身にまとい、神のすべての命令に従順で忠実である。

「主は、真理を知っていながら、言葉でも行いでもその戒めに従わない者をお赦しにならない。」マラナタ、243。

「真理」と訳されるヘブライ語は三つの文字から成っており、それぞれの文字には固有の意味がある。その三つの意味は、三天使のメッセージの意味でもある。また、それらは第一の天使のメッセージの意味でもある。というのも、第一の天使のメッセージはアドベンチズムの始まりにおけるメッセージであり、第三の天使のメッセージはアドベンチズムの終わりにおけるメッセージだからである。イエスは初めによって終わりを示されるので、第一の天使は第三の天使のメッセージのあらゆる預言的な道標を備えている。こうして、三つのヘブライ文字の意味は、第三の天使のメッセージだけでなく、第一の天使のメッセージの象徴ともなる。

黙示録のヨハネは、その時すでにあつた事柄を書き記すように告げられ、そうすることによって同時に、将来起こる事柄も書き記すことになった。彼は終わりを明らかにするために、初めを記した。セブンスデー・アドベンチストは、ミラー派のメッセージ、すなわち第一の天使の使命を学び、宣べ伝えるよう、明確に示されている。それらの真理とその歴史を学び、宣べ伝えることによって、私たちは第三の天使の使命を宣べ伝え、第一の天使の歴史を繰り返すことになる。

「神は私たちに新しいメッセージを与えておられるのではありません。私たちは、1843年と1844年に私たちを他の教会から引き出したそのメッセージを宣べ伝えるべきです。」『レビュー・アンド・ヘラルド』1905年1月19日。

「1840年から1844年に与えられたすべてのメッセージは、いま力強く伝えられるべきである。なぜなら、方向を見失っている人々が多くいるからである。これらのメッセージは、すべての教会に届けられるべきである。」『Manuscript Releases』第21巻、437頁。

「1841年、42年、43年、44年に私たちが受けた真理は、今や研究され、宣べ伝えられるべきである。」『Manuscript Releases』第15巻、371ページ。

「警告が与えられました。1842年、1843年、1844年にこのメッセージが与えられて以来、私たちが築いてきた信仰の土台を乱すものを、何一つ入り込ませてはなりません。私はこのメッセージに関わっており、それ以来ずっと、神が私たちにお与えになった光に忠実に、世の前に立ってきました。日々、切なる祈りをもって主を求め、光を求めながら、私たちの足が据えられたその土台から退くつもりはありません。神が私にお与えになった光を、私が手放すと思いますか。それはとこしえの岩のようであるべきものです。与えられて以来、ずっとそれが私を導いてきました。」レビュー・アンド・ヘラルド、1903年4月14日。

第一の天使のメッセージと、そのメッセージが提示された歴史は、いくつかの預言的な留保を伴いつつ、私たちの現在の歴史と並行し、それを例証している。これら二つの歴史はまた、「真理」という語を形作るために神の言語学者が用いた三つの文字によっても表されている。そしてその「真理」という語は、永遠の福音を表している。

アドベンチズムの始まりにおけるミラー派の歴史（第一の天使を表す）と、アドベンチズムの終わりにおける第三の天使によって表される歴史は、互いに並行しているが、いくつかの相違点もある。

第一の天使は裁きの開始を宣言し、第三の天使は裁きの終結を宣言する。アドベンチズムの歴史が展開してきた予言的構造は、その始まりと終わりの双方において同一である。どちらの端についても、歴史に到来する三人の天使の三つの段階に従っていることを示すことができる。そして、その三人の天使は、あの三つの文字としても表される。ゆえに、アドベンチズムの両端における予言的出来事の順序は、三人の天使の三つの段階に基づいており、その段階は、「真理」という語を形作る三つのヘブライ文字でも表される道標である。

アルファはアドベンチズムの始まりを、オメガはその終わりを意味し、中間の文字、すなわち第十三番目の文字は、したがってアドベンチズムの反逆をその始まりから終わりに至るまで指し示している。

私たちは神の道がどこにあるのかについて教えられている：

神よ、あなたの道は聖所にあります。私たちの神のように大いなる神が、ほかに誰かいますか。詩篇 77:13

聖所において、神の方法は三天使のメッセージと同じ三つの段階であることが分かる。外庭では、神への畏れが人をささげ物をささげて義認を受けることへと導く。聖所では、香の祭壇が象徴する祈りの生活、供えのパンの机が象徴する学びの生活、燭台が象徴する奉仕の生活によって、聖化が表されている。至聖所は裁きを表す。第一の天使のメッセージに表される神への畏れを持つとき、私たちは外庭、すなわち十字架のもとで義認を求める。私たちが義認され（義とされ）ると、聖所が象徴する聖化の生活（聖さにおける成長）の新しさのうちを歩む。聖所は、真夜中の叫びを伴う第二の天使のメッセージの期間にミラー派が行ったような、キリスト者の働きを表している。義認され、聖化されることによって、私たちは至聖所が表す裁きに備えられる。聖所の三つの段階は、ほかにもさまざまなことを表すが、とりわけ神学用語の三つ、すなわち義認・聖化・栄化を表し、また三天使のメッセージを表し、もちろん第一の天使のメッセージも表し、さらに「truth」という語を作るために用いられる三つの文字も表している。

聖所の外庭にも、三つの段階すべてが見いだされる。聖所に入る最初の段階は、第一の天使が第三の天使に対応しているように、聖所の最後の段階を示さなければならない。外庭の第一の段階はいけにえを屠ることであり、義認を表している。第二の段階は洗盤で、最終段階に先立って脂肪（罪）が取り除かれ、いけにえが清められる。洗盤の水は第二の段階の特徴である。第三の段階は実際の燔祭であり、それは裁きが成就した十字架上のキリストを象徴していた。同じ三つの段階は聖所の第一の段階にも存在し、同様に第一の天使のメッセージの中にも存在する。アルファとオメガの原理は、聖所の中にあるのと同様に三天使のメッセージの中にもあり、また「truth」という語を形作る文字の中にもある。

2300年の預言は同じ構造を持っている。この預言は三つの勅令から始まり、1844年10月22日に第三天使のメッセージが到来したところで終わる。この預言は五つの預言的な系列を示しており、2300年の預言の冒頭にある歴史は、それら五つの預言それぞれの終わりの歴史を表している。この2300年の預言全体の始まりには三つの勅令があり、終わりは三つのメッセージで締めくくられる。

紀元前457年に予言の始まりがあり、苦難の時代の中で、ユダヤ人が帰還し、神殿と都を再建することが許された。予言どおり、紀元前457年に始まった再建事業は49年後、やはり苦難の時代に完成した。その49年の始まりは、その49年の終わりを示している。

紀元前457年は、キリストが洗礼のときに油注がれたことを示す預言の起点である。彼の油注ぎは、旧エルサレムではなく新しいエルサレムの市民となる民を集める働きの始まりを画した。これは、古代イスラエルが紀元前457年に文字どおりのエルサレムを再建するために集められたのと同様である。

紀元前457年はまた、キリストがいつ十字架につけられるかを示す預言の始まりでもある。シスター・ホワイトは、十字架の歴史を1844年10月22日の大失望と重ね合わせ、また紅海横断の歴史も大失望と結び付けている。紀元前457年には、紅海でのヘブライ人の失望、アドベンチストにとっての大失望、十字架における弟子たちの失望、そして紀元前457年のエズラの失望を象徴する失望があった。

「エズラは、多くの者がエルサレムに帰還すると期待していたが、その呼びかけに応じた者の数は失望するほど少なかった。家や土地を手に入れた多くの者は、これらの

財産を犠牲にする気はなかった。彼らは安逸と快適さを愛し、そのまま留まることに十分満足していた。彼らの態度は、本来なら信仰によって前進している者たちと運命を共にすることを選んだかもしれない他の人々にとって、妨げとなった。」『預言者と王たち』612ページ。

紀元前457年はまた、古代イスラエルが神から離縁され、福音が異邦人に伝えられる時を示す預言の起点であり、その出来事は古代イスラエルに特に与えられた490年の特別な猶予期間の終わりを画する。したがって、紀元前457年は彼らの猶予期間の始まりを、紀元34年はその終わりを示しており、これは型として、アドベンチズムの猶予期間が1844年に始まり、日曜法令で終わることを示している。

2300年の預言の中には、他にもいくつかの内部の時の預言があるが、いずれもアルファとオメガの印を帯びている。その始まりがその終わりを示している。

古代イスラエルが神の律法の担い手とされたこと、そして現代イスラエルは神の律法の担い手とされたばかりでなく、その預言の担い手ともされたことに留意することは重要である。主が古代イスラエルと契約を結ばれたとき、主は彼らを、二枚の石の板に書き記された十戒の担い手とされた。主がミラー派の歴史において現代イスラエルと契約を結ばれたとき、主は彼らを、1843年と1850年のパイオニア図表で表されたハバククスの二枚の板に示されたご自身の預言の言葉の担い手とされた。古代イスラエルの始まりは現代イスラエルの始まりを例証している。

主はご自身の民イスラエルを召し出し、彼らを世から分かち、彼らに聖なる務めを委ねようとされた。主は彼らを御自分の律法の担い手とし、また彼らを通して、人々の間にご自身を知る知識を保つことを意図された。彼らを通して、天の光は地の暗い所に輝き出て、すべての民に、偶像礼拝から離れて生けるまことの神に仕えるよう呼びかける声が聞かれるはずであった。

もしヘブライ人が、彼らに委ねられた務めに忠実であったなら、彼らは世界にあって強大な勢力となっていただろう。神は彼らの守りとなり、彼らをほかのすべての国々の上に高く上げられただろう。神の大能と真理は彼らを通して明らかにされ、神の知恵深く聖なる支配のもとで、あらゆる偶像礼拝のいかなる形にも勝る神の統治の優越を示す模範として、彼らは世に立っていただろう。だが彼らは神との契約を守らなかった。彼らはほかの国々の偶像礼拝の慣行に従い、地において創造主の御名を誉れとするどころか、それを人々の侮りにさらしてしまった。

それでも神のご計画は成就されなければならない。その御心の知識は世界に知らされなければならない。神はその民に圧制の手を下し、彼らを捕囚として諸国民の間に散らされた。苦難のうちに、彼らの多くは自らの背きを悔い改め、主を求めた。こうして異邦の国々の至る所に散らされた彼らは、まことの神の知識を広めていった。

この時代において、神は、古代イスラエルを召されたように、ご自身の教会を地上にあって光として立つよう召された。真理という力ある大なた、すなわち第一、第二、第三の天使のメッセージによって、神は一つの民を諸教会と世からより分け、彼らをご自身に聖なる近さのうちへと引き寄せられた。神は彼らをご自身の律法の担い手とし、またこの時代のための偉大な預言の真理を彼らに委ねられた。古代イスラエルに

委ねられた聖なる託宣と同様に、これらは世界に伝えられるべき聖なる信託である。

預言は、第一の天使が「すべての国民、部族、言語、民族」に向けてその宣言を行うと告げている。同じ三重のメッセージの一部をなし、この時のためのメッセージである第三の天使の警告も、それに劣らず広く行き渡るであろう。「神の戒めとイエスの信仰」と記された旗印が高く掲げられるべきである。第一と第二のメッセージの力は、第三においていっそう強められる。それは、天の中空を飛ぶ天使が大声で告げるものとして預言に示されており、世界の注目を集めることになる。

死すべき人間に向けられたものとして最も恐るべき警告は、第三の天使のメッセージに含まれている。憐れみを少しも交えない神の怒りを招くような罪は、なんと恐ろしいに違いない。しかし、人々はこの重要な事柄について闇の中に置き去りにされてはいない。獣とその像を拝むことに対する警告は、神の裁きが臨む前に全世界に告げられる。すべての者が、なぜその裁きが下されるのかを知り、逃れる機会を得るためである。『時のしるし』1910年1月25日。

ハバクク書第2章の成就として二枚の板が作製されたことは、いくつかの預言の成就であった。

私は見張りに立ち、やぐらの上に身を置き、主が私に何を語られるか、また私が戒められるとき何と答えるべきかを見守っていよう。主は私に答えて言われた。「幻を書き記し、板にはっきりと記せ。読む者が走れるように。この幻には定められた時がある。終わりににはそれは語り、偽らない。遅れるように見えても、それを待て。必ず来る。遅れることはない。」

見よ、高ぶる者の魂は彼のうちで正しくない。しかし、義人はその信仰によって生きる。ハバクク書 2:1-4

1843年の先駆者図表と1850年の先駆者図表の作成はいずれも、預言の成就であった。ハバククの表の研究は、それを十分に裏づけている。しかし、ハバクク書の該当箇所は、この点に関する私たちの議論に重要な貢献をしている。

「私は、1843年の図表が主の御手によって導かれ、改変してはならないこと、数字は主の御心のままであったこと、また、主の御手がそれを覆っていくつかの数字にある一つの誤りを隠し、その御手が取り去られるまで誰にもそれが見えないようになっていたことを見た。」『初期の著作』、74、75。

1843年以降、主は別の図表を作るようお命じになったが、最初の（1843年の）図表は、靈感による場合を除き、変更してはならないともお命じになった。

私は、真理は板の上に明白に示されるべきであり、地とそこに満ちるものは主のものであり、それを明らかにするために必要な手段を惜しむべきではないと見た。私は、古い図表は主の指示によるものであり、靈感によらない限り、その数字の一つたりとも変更されるべきではないと見た。私は、その図表の数字は神が望まれるとおりであり、御手がその上であって、いくつかの数字にある誤りを覆い隠し、御手が取り除かれるまで誰もそれを見ないようにされたのだと見た。Spalding and Magan, 2.

1850年の図表を作成したニコルズ兄弟と同居していた頃、彼がその図表を作っていた時期に、ホワイト姉妹は聖書の中に1850年の図表を見たと言った。

私は、ニコルズ兄弟によるその図表の出版のうちに神がおられるのを見た。私は、この図表についての預言が聖書にあるのを見た。そして、この図表が神の民のために備えられているものであるなら、それが一人にとって十分であるなら別の者にとっても十分であり、また、もし一人がより大きなサイズで描かれた新しい図表を必要とするなら、皆も同じ程度にそれを必要とする。Manuscript Releases, 第13巻, 359.

ハバククは「この幻を書きしるし、板の上に明らかにせよ」と命じた。ハバククの二つの板は、神がアドベンチズムと契約を結び、彼らを御自分の預言を託された民とされたことのしるしであり、ちょうど神が古代イスラエルと契約を結び、律法の二枚の石板を与え、律法を託された民としての責務を負わせたときと同様であった。しかしハバククは、幻を明らかにするためのその板に関して二つの種類の礼拝者を識別している。ひとつは「魂が高ぶって」「まっすぐでない」者であり、もうひとつは「義人」で「その信仰によって生きる」者である。

ハバクク書の文脈は、義とされている者たちは、二枚の板によって表されている預言のことばに基づく信仰によって生きていることを示しており、したがって義とされていない者たちはアドベンチズムの初めを退けたのです。私が述べたい点は、しばらく前に私たちが検討した一つの箇所に基づいています。次のようにあります：

しかし、二千三百日の期間と関連づけた聖所の問題、神の戒め、そしてイエスの信仰といった主題は、過去の再臨運動を説明し、私たちの現在の立場が何であるかを示し、疑う者の信仰を確立し、栄光ある将来に確信を与えるのに、まことにうってつけである。私はしばしば見せられたが、これらこそが、使者たちが詳しく取り扱うべき主要な主題であった。『初期の著作』63ページ

私たちは今しがた、これら四つの真理——聖所、二千三百日、神の戒め、そしてイエスの信仰——をすべて見直した。私たちはこれら四つの真理すべてを、「過去の再臨運動を説明し、私たちの現在の立場が何であるかを示すために完全に計算された」真理の枠組みに当てはめた。その枠組みは「初出の法則」であり、アルファとオメガのしるしであり、そして真理の枠組みでもある。なぜなら、「真理」という語は、アドベンチズムの始まりを説明するために意図された「現在の真理」として特定されている四つの真理すべてとまったく同じしるしを帯びているからである。

少なくとも、これは、私たちが検討している「真理」と訳される語が、永遠の福音の枠組みであり、最後の警告のメッセージの枠組みであり、第三天使のメッセージの枠組みであり、そしてイエス・キリストの啓示の大きな部分を成していることを意味する。

黙示録一章の最初の三節に「イエス・キリストの黙示」として表された最後の警告のメッセージは、黙示録の終わりで二度目に証しされている。黙示録の終わりは旧約聖書の最初の節々についても、また旧約聖書の最後の節々についても証ししている。これら四つの参照箇所から、預言の言葉に預言の言葉を重ねるといふ神の原則を用いれば、最後の警告のメッセージが、創造主とその被造物との関係に関わることを推論できる。それは御自身の創造の御力に関わる。それはまた、その創造の御力がどのようにして教会に伝えられ

るかに関わる。それは初めと終わりを結びつける神性の属性に関わる。それは恵みの時の終わりの直前に到来するメッセージであり、さらに多くの意味を持つ。これらを合わせて考えると、それは神の創造の御力についてなのである！そして、その創造の御力についての最初の言及は、創世記一章の冒頭、第一節から第二章三節までにある。

初めに神は天と地を創造した。地は形がなく、むなしく、深淵の上には闇があった。神の霊が水の面のうを動いていた。

神は言われた、「光あれ。」すると光があった。神はその光が良いのを見て、光を闇から分けた。神は光を昼と呼び、闇を夜と呼んだ。夕べがあり、朝があった。これが第一の日である。

神は言われた、「水のただ中に大空があれ。水と水を分けよ。」神は大空を造り、大空の下にある水と大空の上にある水とを分けられた。するとそのとおりになった。神は大空を天と名付けられた。夕べがあり、また朝があった。第二日である。

神は言われた。「天の下の水は一つ所に集まり、乾いた地が現れよ。」すると、そのとおりになった。神は乾いた土地を「陸」と呼び、水の集まりを「海」と呼ばれた。神はそれを見て、良いとされた。神はまた言われた。「地は草をはやし、種をつける草、その種がその身のうちにあつて、その種類にしたがつて実を結ぶ果樹を生じさせよ。」すると、そのとおりになった。地は草を生じ、各々その種類にしたがつて種をつける草、また、その種がその身のうちにある各々その種類の実を結ぶ木を生じた。神はそれを見て、良いとされた。夕べがあり、また朝があった。第三の日である。

神は言われた。「天の大空に光るものがあつて、昼と夜を分けるようにせよ。しるしのため、季節のため、日や年のためのもとなれ。地上を照らすために、天の大空の光となれ。」すると、そのとおりになった。神は二つの大きな光るものを造られた。大きい方の光は昼を治め、小さい方の光は夜を治めるためのものであつた。また、星も造られた。神はそれらを天の大空に置いて地上を照らさせ、昼と夜を治めさせ、光と闇を分けさせた。神はそれを見て、良しとされた。夕べがあり、朝があった。第四の日であつた。

神は言われた。「水は命ある動く生き物を豊かに生み出せ。また、鳥が地の上、天の大空を飛ぶようにせよ。」神は大なる海の生き物と、水がその種類ごとに豊かに生み出したあらゆる動く生き物、さらに翼のあるあらゆる鳥を、その種類ごとに造られた。神はそれを見て、良いとされた。神はそれらを祝福して言われた。「生めよ、増えよ。海の水を満たせ。鳥は地の上で増えよ。」夕べがあり、朝があった。第五の日であつた。

神は言われた。「地はその種類に従つて生き物を生じよ。家畜、はうもの、地の獣をその種類に従つて。」そして、そのとおりになった。神は地の獣をその種類に従つて、家畜をその種類に従つて、また地の上にはうすべてのものをその種類に従つて造られた。神はご覧になり、それは良かった。神は言われた。「われわれにかたどり、われわれの似姿に人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地のすべて、地の上をはうすべてのものを治めさせよう。」こうして神はご自分のかたちに人を創造された。神のかたちに彼を創造し、男と女として彼らを創造された。神は彼らを祝福し、彼らに言われた。「生めよ、ふえよ、地に満ちて地を従えよ。海の魚、空の鳥、地の上を動くすべての生き物を治めよ。」神は言われた。「見よ、地の全面にある種を持つすべての草と

、種を実らせる実のあるすべての木を、あなたがたに与えた。それはあなたがたの食物となる。また、地のすべての獣、空のすべての鳥、地の上をはうすべての、いのちあるものには、食物としてすべての緑の草を与えた。」そしてそのとおりになった。神は造ったすべてのものをご覧になった。見よ、それはきわめて良かった。夕があり、朝があった。第六日である。こうして天と地と、その一切のものが完成した。第七日に、神は自ら造ったわざを終え、第七日に、造ったすべてのわざから離れて休まれた。神は第七日を祝福し、これを聖別された。神が創造し作ったすべてのわざから、その日に休まれたからである。創世記 1:1-2:3。

前の節々は、創造全体の証しを表しており、神のことばが創造の力を持っていることを強調している。

全地は主を恐れよ。世界に住む者はみな、彼の前におののけ。彼が仰せられると、それは成った。彼が命じられると、それは堅く立った。詩編 33:8、9。

世界を創造したのと同じ創造力を、キリストは人々を変えるために用いている。

諸世界を存在へと呼び出した創造的な力は、神の言葉のうちにある。この言葉は力を与え、いのちを生み出す。すべての命令は約束であり、意志によって受け入れられ、魂に受け取られるとき、それは無限なる方のいのちをもたらす。それは人の本性を変え、神のかたちに従って魂を新しく造りかえる。

このように与えられたいのちは、同様にして養われる。「神の口から出る一つ一つの言葉によって」（マタイ4:4）人は生きる。『教育』126。

イエス・キリストの啓示は、神のことばが人々にどのように伝えられるかを強調している。それは父から御子へ、御使いへ、そしてそれを書き記して諸教会に送る預言者へと伝えられる。黙示録の冒頭と結末で示されているこの伝達の過程は、御使いたちが梯子を上り下りするヤコブの梯子によっても描かれている。また、聖所に油をもたらすゼカリヤの二本の金の管によっても例示されている。神と人との間の伝達過程は聖書預言の主題であり、発せられるメッセージには宇宙を造った創造の力が宿っている。黙示録1章の伝達過程においては、諸教会に伝えられるメッセージが、ラオデキア人をフィラデルフィア人へと変える力を備えていると理解されるべきである。

旧約聖書であれ新約聖書であれ、その始まりを見ようと終わりを見ようと、メッセージは同じである。神は最後の警告のメッセージを告げておられ、それは、聞く者がそれを聞いて守るなら、神の創造の力を内に含んでいる。このことを成し遂げるメッセージは、アルファとオメガという神的な枠組み、すなわち初め・中・終わりの中に据えられている。「真理」という語を形づくる三つのヘブライ文字は永遠の福音であり、その文字とその意味、そしてそれらが結び合わさって生み出す語は、その原理を象徴するとともに、アルファでありオメガでもあるお方をも象徴している。これは御自身の創造の力を強調している。創造物語の最後の三つの言葉は、それぞれが「真理」を成す三つの文字を、その順序で頭文字として持っている。

創造物語の結びをなす三つの語は、合わせると「真理」という語になる三つの文字で始まっている。その節の最後の三語は、順に א (Aleph)、מ (Mem)、ת (Tav) という文字

で始まる。これら三語は「神」「創造した」「造った」と訳される。これらの三語がそれぞれ順に א (Aleph)、מ (Mem)、ת (Tav) で始まっていることは、創造物語の完全性と秩序正しさをさらに強調している。このパターンは、ユダヤ教の注解者たちによって、ヘブライ語本文の興味深い言語的特徴として指摘されている。

創造の物語は「初めに」という言葉で始まり、アルファとオメガ、始まりと終わり、最初と最後を表す三語で終わる。創世記の証しに描かれた創造の力は、素晴らしい言語学者の署名で始まり、そして終わる。

預言者ヨハネが、当時あったことを書き記しながら、同時にやがて起こるであろうことも書いていたときに強調したのは、物事の最初がその物事の最後を示すということである。

旧約聖書の終わりに記されているエリヤの最後の警告のメッセージは、日曜法の危機と迫り来る最後の七つの災いという文脈において、同じ預言的原則を示している。

「『初出原則』とそれが表すすべては、『現在の真理』が置かれるべき『枠組み』である。その枠組みは『初出原則』であり、それはまた神の属性の一つでもある。」

アドベンチズムの始まりを表すダニエル書と、アドベンチズムの終わりを表す黙示録を、最初が最後を示すという原則で見ると、驚くべき類似が見いだされます。ダニエル書は、パルモニ（「奥義を数え定める驚くべき方」という意味）という名を用いることで、イエスのある属性を提示しています。ダニエルはまた、イエスを大天使ミカエルとして紹介しています。ヨハネもダニエルと同じように用いられており、彼が指し示すのは、数学の達人でも天使たちの長でもなく、言葉の達人です。イエスをアルファベットの達人として考えるとき、聖書で最も長い章である詩篇119篇に目を向けるべきです。

詩篇119篇はアルファベット順の頭文字詩であり、八節からなる各区分において、その八つの各節の頭文字は同じ文字で始まります。ヘブライ語のアルファベットは22文字なので、八節の区分も22あります。各区分にはアルファベット順に文字が割り当てられており、それぞれ、その文字に当てられた八つの節はその文字で始まります。各文字につき八節、つまりヘブライ語の22文字に八節ずつで、合計176節になります。この詩は、混沌ではなく秩序の神である神への従順を強調しています（そのため頭文字詩という構成になっています）。

詩篇119篇におけるもう一つの顕著な主題は、神の御言葉がすべてにおいて十分であるという深遠な真理です。この詩篇全体を通して、神の御言葉を指す語が八つ用いられています。すなわち、律法、証し、教え、定め、命令、さばき、御言葉、掟です。ほとんどすべての節で、神の御言葉が言及されています。詩篇119篇は、聖書の性質を示すだけでなく、神の御言葉が神ご自身の御性質そのものを映し出していることも示しています。詩篇119篇に示されている神のこれらの属性に注目してください。

1. 義（7節、62節、75節、106節、123節、138節、144節、160節、164節、172節）
2. 信頼に足ること（第42節）
3. 正直さ（43、142、151、160節）

4. 忠実（第86節）
5. 不変性（第89節）
6. 永遠性（第90節、152節）
7. 光（第105節）
8. 純粹さ（第140節）

この詩篇は、二つの「幸い」で始まる。「幸い」なのは、道がまったき者、神の律法に従って生き、そのおきてを守り、心を尽くして神を求める者である。これらが、この偉大な詩篇における私たちへの教訓である。神のことは、私たちに賢くし、義において訓練し、あらゆる良いわざのために備えを整えるのに十分である（2テモテ 3:15-17）。

もちろん、詩篇119篇は、宗教界でほとんど決着がついていない話題にも関わっている。それは、どの節が聖書の真ん中の節で、どの章が聖書の真ん中の章なのかという問題だ。インターネットで検索すれば、どの版・訳の聖書を用いるのか等々をめぐって、さまざまな議論があることがわかるだろう。議論のどの立場にも共通する問題は、聖書の「真ん中」の定義（それが節であれ章であれ）は、人間の学者や批評家ではなく、聖書の著者が定めるべきだという点である。

聖書は、万物には始まりがあり終わりがあると教えている。すべてのことには時がある。

天の下のすべての事には定められた時があり、すべての営みには時がある。生まれる時があり、死ぬ時がある。植える時があり、植えたものを引き抜く時がある。伝道者の書 3:1、2。

生まれる時があり、死ぬ時がある。そして、私たちの人生の始まりと終わりのあいだには、そこに営まれる生がある。誕生はほんの一瞬の出来事であり、死もまたそうだ。人生はその中間にあり、そこには生まれる時や死ぬ時よりもはるかに多くの歴史が積み重なる。

「初出の法則」では、中間には一般に、初めや終わりよりもはるかに多くの証拠が伴う。聖書の中から単一の節や章を取り出してそれを中間だと定めるのは、たとえ初めと終わりが本質的に時間上の一点であっても、聖書的証拠を無視することになる。中間は一般に、ある期間である。もちろん、初め・終わり・中間は互いに一致するが、しばしば終わりに見られる同一の道しるべは、初めのものと反対である。

イエスはバプテスマのヨハネをエリヤであると同定し、両者は同じ預言的出来事の連なりを示している。しかし、エリヤは彼を投獄し殺そうとした邪悪な女（イゼベル）に迫害されたが、彼女はそれを成し遂げることはなかった。エリヤの象徴であったヨハネに対しては、邪悪な女（ヘロデヤ）が彼を投獄して殺すことを企て、そして実際にそうした。エリヤとヨハネは互換的な象徴だが、互いに並行しつつも相反する預言的特徴をいくつか備えている。エリヤは死ななかったが、ヨハネは死んだ。互いに対応する預言的な道しるべがしばしば正反対であると理解することは、望む者が聖書の真ん中が詩篇118篇であることを見いだす助けとなる。

これまで定義してきたとおりの「初出の法則」という原則を用いると、聖書の中間部分の始まりは、聖書で最も短い章である詩篇117篇（2節から成る）であることがわかる。そ

の次に続くのが聖書の中に当たる詩篇118篇であり、さらに118篇の後には、聖書で最も長い章であり聖書の間部分の終わりでもある詩篇119篇が続く。すばらしい言語学者は、始まりを最も短い章で示し、終わりを最も長い章で示す。これは互いに対照的な二つの章である。始まりは種であり、終わりは、中ほどに置かれているあらゆる証しが結び合わされ、完全に成熟した植物が形づくられるところである。詩篇117篇に注目しなさい。

すべての国々よ、主をほめたたえよ。すべての民よ、主をほめたたえよ。私たちに對する主のいつくしみは大きく、主のまことはとこしえに続くからである。主をほめたたえよ。詩篇 117:1、2。

私たちが考察している三つの文字から成る語は、第二節で「真理」と訳され、聖書の中間の始まりを表している（聖書の間とは詩編117～119篇のことである）。中間の終わりは詩編119篇であり、詩編118篇はその中間の中間である。詩編118篇は聖書で最も短い章と最も長い章に挟まれており、その始まりである最短の章は、永遠の福音の三段階を表す三つの文字から成る「真理」という語を示しており、それらは真理を理解するための枠組みとなっている。その枠組みとは、アルファでありオメガであるキリストの品性を表す原則である。

中間の締めくくりである第119章は、聖書の中ほどに置かれたアルファベットの頭字詩で、すばらしい言語学者を強調している。第119章では、同じ語が4回「真理」と訳されている。

どうか、私の口から真理の言葉をまったく取り去らないでください。私はあなたの裁きに望みを置いているからです。43節

あなたの義はとこしえの義、あなたの律法は真理です。142節。

主よ、あなたは近くにおられます。あなたのすべての戒めは真理です。151節。

あなたの御言葉は初めから真実です。あなたの正しい裁きはすべて、永遠に続きます。160節。

これらの節に示されている真理は、初めから終わりを明らかにする聖書預言の原則であり、また、その節における真理とは、アルファとオメガが、初めと終わりに対してそうされたのと同様に、聖書の中ほどにもご自身の署名を記されたということである。最初であり最後である方の署名は、第三の天使の最終警告メッセージを提示するための「枠組み」である。中央部分の末尾には、「真理」と訳される語を用いる節が四つある。ただし、四つ目の箇所は単に「真実」と訳されている。それら四つの節のうち最後のものは、「初めから」その言葉が「真実」であることを明らかにしている。

創世記1章と2章の創造物語の初めにおいて、「truth」という語は直接には書かれていないが、創造物語の最後の三語の中に表されている。というのも、それぞれの語が順に「truth」という語を構成する文字で始まっているからである。初めに言があった。万物は彼によって造られた。そして、創世記における創造の証言は「初めに」という言葉で始まり、イザヤ書で彼こそ唯一の神であることの証拠として定義されているキリストの属性に関連する真理を表す三つの言葉で終わっている。

聖書の中央部（詩篇117～119篇）は、117篇において「真理」という語の用法を通して、始まりが終わりを表しているという真理に言及することから始まる。この語は三つの文字から成り、それらは永遠の福音と三天使のメッセージを表し、創造物語の結末を指し示している。聖書の中央部の締めくくりは、いま彼のご品性について明らかにされている事柄が「啓示」という語の定義と一致しているという理解を確立するための、その驚くべき言語学者が作り上げたアルファベットの提示である。というのも、「イエス・キリストの啓示」とは、これまで十分には、あるいは全く認識されてこなかったキリストのご品性の一側面を提示するよう意図されたメッセージだからである。この啓示は契約史の流れと一致している。なぜなら契約史には、神の歴史が展開する中で、神が御名を通してご自身を現そうとしてこられた努力の証拠が含まれているからである。

律法の偉大な原則、すなわち神の本質そのものは、山上でのキリストの言葉のうちに体现されています。それらの上に建てる者はだれであれ、永遠の岩であるキリストの上に建てているのです。みことばを受け入れるとき、私たちはキリストを受け入れます。そして、このようにしてキリストの言葉を受け入れる者だけが、彼の上に建てているのです。「すでに据えられている土台、すなわちイエス・キリスト以外に、だれもほかの土台を据えることはできません。」コリント人への第一の手紙 3章11節。「この名以外に救いはありません。天の下で人間に与えられた名のうち、私たちが救われるべき名はほかにありません。」使徒の働き 4章12節。キリスト-みことば、神の啓示、すなわちそのご性質、その律法、その愛、そのいのちの現れ-こそ、私たちがいつまでも残る品性を築き上げることのできる唯一の土台です。祝福の山、148頁。

もちろん、この真理について論じるべきことはまだ多くありますが、ひとまずここで終わりにします。